

2022 年度 自己評価・学校関係者評価報告書

2022 年 3 月

学校法人亀ヶ谷学園

幼保連携型認定こども園・宮前おひさまこども園

① 園の教育目標

- ・わくわく生き活きと輝き創造的にあそべる子ども
 - ・わくわく人が好きになり、人に好かれ、思いやれる子ども
 - ・わくわく響関の言葉が言え、秩序が気持ち良いとかんじられる子ども
- わくわく響き合える豊かなところをもった子ども

② 本年度に定めた重点目標

認定こども園移行初年度であることも踏まえ、以下の3つを重点目標として定めた。

- ・子どもたちの主体的なあそびや生活の実現
- ・園内研修を通して課題解決を図り、保育の質を高め、保育者の専門性を深める。
- ・在園時間が異なる子どもたちへの配慮について

③ 具体的評価項目の達成及び取り組み状況

項目	評価	取り組み状況
教育目標	A	園の教育目標については全ての職員が共感・理解し、日々の保育実践を通して実現できるよう努力して取り組んでいる。
保育計画	A	昨年度以上に子どもの興味・関心から計画を立案できるように配慮している。子どもたちの興味・関心について写真を活用して対話の時間を設けたり、ウェブマッピングの方法を用いて遊びが豊かになるような環境を考えたり、子どもの姿をベースにしながら質の高い教育・保育の展開を目指している。
保育環境	A	園庭に井戸が設置されるなど、子どもたちが自然と触れ合いながら遊び込める環境の充実をさらに進めていきたい。また、宮前幼稚園の自然豊かなで広大な園庭も最大限に活用していきたい。
安全への配慮	A	新型コロナウイルス感染拡大に努め、消毒・清掃など隅々まで行き渡るように意識をしていた。ヒヤリ・ハット記録から環境の再構成も実施。
チーム保育・同僚性	A	年齢・経験年数が異なる幅広い保育者集団の中で、それぞれが尊敬の念を持ちながら接することを大切にしていきたい。業務上の課題については、建設的な話し合いを通しての解決を目指している。 同僚性向上のために、大学教授に定期的に園内研修を実施していただき、法人としての重要課題として取り組んでいる。

保育内容・方法	A	一人ひとりを大切にした保育実践を職員の目標としている。また行事を中心に子どもの主体性が尊重される競技へと転換してきて数年を迎える。これまで以上にブラッシュアップしていきたい。
乳児保育	A	緩やかな担当制の中、一人ひとりの生活リズムに沿った生活の実現を目指している。保育者の連携やシフトの工夫など来年度以降もより良い方法を探していきたい。
保護者とのかかわり	A	ポートフォリオや写真等、可視化された記録を用いながら子どもの育ちを伝える取り組みが一定の評価を得ている。外部研修の講師を務めることも多数ある。子どもを真ん中に、園と保護者が手を取り合って子どもの育ちにかかわる関係性を築いていきたい。 また、現在副園長が大学院に進学し研究を進めている。
職務の遂行	A	それぞれ自分の役割を自覚し、責任を持って業務にあたっている。
専門性の向上	B	新型コロナウイルスの拡大により Zoom 等による遠隔研修に気軽に参加できるようになった。一方で、職員全体で集まる機会などが十分に確保できなかったことが課題である。
食育	B	感染拡大の懸念から以前のような食育活動が行えなかった。また、保護者の試食等も中止している状況なので、感染状況を鑑みながらできる限り早く以前の食育活動を実施していきたい。
子育て支援	B	すくすく広場は引き続き中止となっている。一方で、戸外で活動できる園庭開放あおぞら広場では、平均20組以上の未就園児親子が来園し、園庭でのあそびを楽しんでいた。今後も継続して取り組んでいきたい。
地域との連携	B	認定こども園へ移行したことにより、これまで以上に川崎市や宮前区といった行政とのつながりが深まった。 子どもたちが地域に出かけたり、地域資源を生かしたりした活動が十分に行えなかった。

④ 総合的な評価結果

A	新型コロナウイルスの感染拡大によって、これまで当たり前になっていた保育の見直しを進め、より子どもの主体性を尊重した保育展開ができるようになった自負がある。特に年長児が取り組んだ運動会やチャレンジ活動では、子ども一人ひとりのやりたい！を尊重しながら、保育者が得意なことを生かして子どもの活動を支えることが出来ていた。 今後も、子どもと保育者が響き合いながら保育できることを目指していきたい。
---	--

評価

A：十分達成されている

B：達成されている

C：取り組まれているが、成果が不十分でない

D：取り組みが不十分である

⑤ 今後取り組むべき課題

保育内容	新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、食育活動や行事などが大幅な見直しを余儀なくされた。子どもにとっての経験を第一に考えながら、よりよい形を模索していきたい。
保育環境	認定こども園の特徴でもある、在園時間が異なる子どもたちへの配慮も含め、子どもたちの園生活を見直し、よりよい生活となるように工夫していきたい。

⑥ 施設関係者評価（自己評価の結果を踏まえて実施）

1. 環境について（園庭、園舎、ファーム）

《園庭》

- ・子どもたちが探検できる環境が素晴らしいと感じている。
作られすぎていない、子どもたち自身が楽しみを自分で見つけられる環境が整っている。
- ・変化のない環境が子どもの安心に繋がると思っていたけれど、時折変化する宮前の環境が子どもたちにとって刺激になることを感じた。

《ファーム》

- ・地域の公園ではできない、本物（土、野菜）に触れ・育てる経験ができるところが良い。
- ・各クラスによっては野菜が多かったり少なかったり、先生のファームに対しての熱量が違ってくるように思う。

《おひさま》

- ・綺麗な園舎で、明るい環境がとても良い。
- ・人数が少ないので、送迎もしやすい。

2. 保育内容について

- ・「これをしなさい」という保育ではなく、一人ひとりの力を信じて、個人に合わせた保育をしてくれるところが好き。
- ・普段の生活や様々な活動の面で、子どもの気持ちが満足するまで「やりたい」を保障してくれるところや、気持ちに寄り添ってくれるところが良いと感じる。
- ・就学した後も、いろんな友だちに対して「こう思ったのか？」と、気持ちを想像しようとしている。

想像ができるというのは、保育の賜物だと感じている。

《おひさま》

- ・人数が少なく、3年間同じクラスでメンバーが変わらないので親子共々馴染みやすいところがいい
- ・完全給食なのでありがたい。
- ・水曜日にあそびの時間を利用する子も、お弁当持参ではなく給食にしてほしい

3. 職員について

- ・色々な世代の先生がいることが良いと感じる。お母さん世代の先生がいることが相談しやすい。
- ・担任の先生が気づかない些細なところに気づいてくれるフリーの先生の存在が安心する。
- ・大好きな先生たちが結婚等により退職していくのが寂しい。育休・産休で戻ってきてくれる先生もいるためそのような形になると嬉しい。

4. 行事について

- ・コロナ禍であっても「できない」にせず、どうしたらできるかを考えてくださるところがよかった。
- ・生活展がとても魅力的だと感じる。
一人ひとりの子どもの気持ちを汲み、受け止めながらひとつのものを作り上げていく大変さもあるだろうけど、その経験ができることがありがたい。
- ・劇あそび会では、衣装を着たくない子や、やりたくない子がいても咎めることなく世寄り添ってくれるところが素敵だと感じた。
- ・劇あそび会に向けて、日々の保育の中で無理なく楽しんでいるところがよかった。
子どもが当日も緊張せず、楽しみに当日を迎えられたのは、日々の中で楽しんでいたからなのだと実感できた。

5. 総合的に

- ・保護者の懇親会を再開してもらいたい
お母さんたちにとって、悩みを相談できる友の存在が大事だと感じている。
就学した後も、悩んだときに相談できるのは幼稚園時代の友だち。
宮前で同じ感覚で過ごした友だちの存在が今の支えになっている。
バス通園の方は特に孤立しやすいので、親同士が繋がる機会を作りたい。
- ・あそびの時間の拡充が本当にありがたい。予約もスムーズにとることができた。
- ・くまさん文庫のお手伝いに関して、本の貸し出しに加えておはようくまさんが始まったことで、役員さんの人数把握や役割を振り分ける仕事が大変そうだった。保護者の意欲的な思いもあるからこそですが…。
- ・おはようくまさんは、すごく良い活動だと感じているので継続していきたい。
お手伝いのお母さんだけではなく。「やってみたい」というお母さんも体験できるような機会を作れたらいいと思う。